

模擬株式会社山口魅来伝統工芸事業グループの 地域ブランド化と伝統継承の取組

山口県立柳井商工高等学校

建築・電子科 3年 内山叶仁 山本悠月
建築・電子科 2年 岡本陽太
ビジネス情報科 2年 内山花梨 清 実悠紀

1 はじめに

山口県立柳井商工高等学校は、山口県教育委員会が主催するやまぐちハイスクールブランド創出事業に参加している。事業内容は、専門高校生が、学科の枠を越え協働しながら起業体験活動や商品開発及びブランド化等、新たな価値の創造につながる教育活動を行うことである。専門高校等の農業、工業、商業、家庭、水産、看護、福祉、総合、特別支援学校(就業実践科/産業科)の9校種のうち、山口県教育委員会が実施校並びに実施校と協力しながら行う連携校を指定している¹⁾。本校は、平成26年度より山口県の伝統工芸「柳井縞」、「富海藍染」をテーマに調査研究を行っており、これらを生かして工業科の実施校として参加している。この事業では専門高校生が集まり模擬株式会社「山口魅来」を設立し、本校は伝統工芸事業グループとして機織機の製作、イベントで機織り体験ワークショップ開催、商品開発、地元小学校への出前授業等の研究を行っている。

この研究文では、令和2年度から参加しているやまぐちハイスクールブランド創出事業の伝統工芸事業グループの取組みについて報告する。この評価は、外部評価等を行い、多面的に検証する。

2 模擬株式会社山口魅来の設立について

令和2年度に実施校と連携校が集まり、模擬株式会社山口魅来を設立した。会社の経営理念として次の3つを掲げた。1つ目は、やまぐちの繋がりを大切にします。2つ目は、やまぐちの幸福と未来を創り出します。3つ目 やまぐちの魅力を伝え、地域から愛されることを大切にします。

また定款も作成し、株式を1株1,000円の100株発行した。株券は各学校で株主を募り販売した。会社の本部は防府商工高校で社長がおり、4つの事業グループに部長、社員を配置し構成している(図1)。本校は、これまでの研究を踏まえ、実施校として伝統工芸事業グループに所属することになった。各事業グループで年間の取組みを検討し、商品開発をした。この商品を模擬株式会社山口魅来として実店舗やインターネットで販売した。そして年度ごとに決算を行い、株主に配当を還元した。

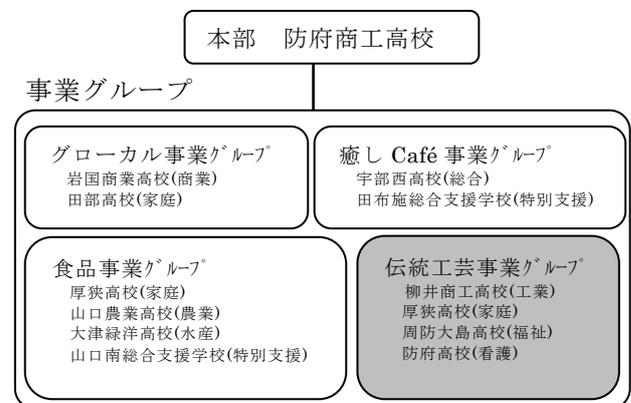


図1 山口魅来の組織図(令和4年度)

商品の販売にあたって、社員で検討し、4つの統一マークを制作した。その中から、山口県をイメージした柔らかい印象の1つのマークに絞り、商標登録を申請した。特許庁から許可がおり、10年間独占的に使用できることになった(図2)。このマークがあれば山口県の専門高校等が制作したものだと分かり、山口県のPRにも繋がりが、地域ブランド化にも期待できる。



図2 商標登録した山口魅来の統一マーク

3 伝統工芸事業グループの取組

伝統工芸事業グループは、商工連携で柳井地域のまちづくりの研究をしている柳井商工高校、地域創生を目指している周防大島高校、縫製や藍染技術がある厚狭高校、看護のスペシャリストの防府高校の4校がタッグを組み、各校の強みを生かしチームで行った。伝統工芸事業グループの部長は本校の生徒が担当し、その他の生徒は社員である。本校は課題研究、インターアクト部、ものづくり部の22名(令和5年度)が取り組んでいる。

伝統工芸事業グループの合同会議を開き、私たちは3つの強みを生かすことにした(図3)。1つ目は山口県の宝である高付加価値の伝統工芸品である柳井縞と富海藍染等を生かすこと。2つ目は、地域の方々の知識や技術を学び、次世代に繋ぐため子供たちとのコラボレーションをすること。3つ目は、このやまぐちハイスクールブランド創出事業に参加する専門高校の様々な知識と技術を融合して挑戦していくこと。この3つの強みの相乗効果により山口県の伝統継承と地域ブランド化の実現に向けて活動を行うことを確認した。



図3 伝統工芸事業グループの3つのキーワード

- (1) 2020人機織り東京2020大会応援プロジェクト
(地域ブランド化戦略 令和2～3年度)
伝統工芸事業グループの合同会議を行い、世

界規模のイベントであるオリンピック・パラリンピック東京2020大会(以下:東京2020大会)に関連付けした新たなる高付加価値のテキスタイルデザインを開発することになった(図4)。そして、このテキスタイルデザインの柳井縞を2020人で機織りをし、東京2020大会を盛り上げるプロジェクトに挑戦した。テキスタイルデザインは、東京2020大会のエンブレムからイメージし「2020縞」を開発した。厚狭高校は、防府市富海の藍染工房 草衣 so-i に藍染の御指導により、天然灰汁発酵建て藍染という方法で糸の染色をした(図5)。この染色した糸を機織り工房 いそや でテキスタイルデザインどおりに一本一本整経し、本校が製作した機織機に糸をかけ、この機織機をイベントに持参した。新型コロナウイルスの影響でチャレンジは苦戦したが、小学生の協力もあり2020人の機織りを達成することができた(図6)。この織り上げた柳井縞の生地を使ってスポーツバッグを製作し、東京2020大会に出場する山口県にゆかりのある出場選手に贈呈し、大会等で使用していただき山口県の伝統工芸品のPRにつなげる戦略を考えた。スポーツバッグは地元の児童と厚狭高校が製作した(図7)。選手18名に贈呈し、手紙等で「大会で使用しました」というメッセージがもられた。



図4 合同会議



図5 糸の藍染



図6 2020人機織りチャレンジ



図7 スポーツバッグ

(2) 地元小学校への伝統工芸出前授業

(伝統継承戦略 令和2～5年度)

山口県の伝統工芸の柳井縞と藍染の次世代への伝統継承に向けて、1年間を通して柳井市内の2校の小学校へ出前授業に行った。小学生が柳井縞の糸のデザインを考え、伝統工芸事業グループで糸の藍染をした。小型機織機に糸をかけて、小学生が3m柳井縞を織りあげた(図8)。織り上げた柳井縞の生地を使って、巾着を作った(図9)。児童は国語の単元である『町の幸福論』で柳井市の地域デザインを考え、1月の発表会で地域の方々へ柳井縞をテーマとした劇でランドデザインを提案した。



図8 機織り学習



図9 商品開発学習

(3) 明治34年柳井縞機織機修復プロジェクト

(伝統継承戦略 令和3～4年度)

柳井市より明治34年に製作された柳井縞機織機修復の依頼がきた。技術継承と向上のため修復を引き受けた。機織機の各部材を原寸し、後世に残すためCADを使って機織機を図面化した(図10)。木材がシロアリに食べられたり、部材がゆがんでいたり、修復は困難だった。歴史的価値のある部材の墨(製造年月日、製作者、金額)は、できるだけ残し完成した(図11)。柳井市役所で修復した機織機の展示会を行い、観光PRのため柳井駅にこの機織機の展示ポスターを製作した(図12)。

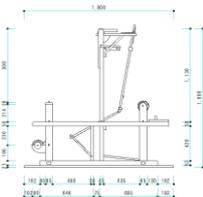


図10 CAD



図11 木材加工



図12 展示会

(4) 伝統養蜂技術を生かした蜂蜜プロジェクト

(地域ブランド化戦略 令和4～5年度)

下松市笠戸島で養蜂をしている磯屋の御協力(図13)のもと、伝統養蜂技術である蜜蜂の巣箱を建築技術により6個製作した(図14)。この蜜蜂の巣箱を笠戸島に設置し、採蜜に成功した(図15)。この蜂蜜を商品化するため地元企業や大学生のアドバイスを得ながら、瓶詰めした蜂蜜のラベルを高校生で複数考案し、アンケート調査により決定した。また販売促進のため、小学校に出前授業へ行き、児童の視点から蜂蜜の瓶ラベルも制作した。商品プロモーションのため生産工程や蜂蜜の写真の撮影の工夫をした。実際の販売では、蜜蜂の巣箱や児童の瓶詰め蜂蜜を効果的に配置し、実店舗販売、インターネット販売等で174個売ることができた(図16)。



図13 養蜂家との会議



図14 巣箱製作



図15 採蜜



図16 蜂蜜ラベル完成

(5) 伝統工芸を生かした商品開発

(地域ブランド化戦略 令和2～5年度)

模擬株式会社山口魅来の実店舗販売やインターネットショップに向けて、伝統工芸事業グループで商品開発の合同会議を行った。柳井縞や富海藍染を生かしたトートバッグ、ネクタイなど意見があった。テキスタイルデザインも各学校で意見を出し合い、「山口魅来縞」、「カツオ縞」

などオリジナルデザインを考えた。防府富海の藍染作家の鈴木先生の指導のもと、柳井縞を織るための糸を濃淡3段階の藍色に染めた。この糸をテキスタイルデザイン通りに整経し、本校が製作した機織機に糸をかけた。そして機織りを行い、富海藍染を生かした柳井縞の織物 20m を毎年1本ずつ完成させた。この柳井縞の生地を生かして4校で、トートバッグ、ネクタイ、キーホルダー、缶バッジ、巾着、柳井縞反物1反などを製作した。また蜂蜜と建築技術を生かし巣箱、小型機織機も製作し、毎年ラインナップが増えている(図17)。販売にあたり商業科生徒が、商品の原価を積算し価格を設定した。材料費、労賃、利益等を計算していくと、例えば小型機織機の価格設定は115,000円と高価になった。安売りすることは伝統工芸品の価値を下げることになるため積算通りの価格で販売することとした。県内のショッピングモール、おいでませ山口館(東京都)などで実店舗販売をし、山口魅来のホームページからインターネット販売を開始した。(図18)。



図17 藍染きんちゃく



小型機織機



図18 実店舗販売とネットショップ販売

4 研究の評価

本事業における伝統工芸事業グループの取り組みについて多面的に評価を行った。

児童のアンケート調査では、「柳井縞の出前授業は楽しかったですか」という質問に、「はい」という回答が90%であった。また児童から「高校生が歴史、定義などを教えてくれ、より一層柳井縞へ

の興味も深まって、次の授業までワクワクしていました」、「東京2020大会に出場する選手に手渡すスポーツバックを作ることができ楽しかったし、大会で使ってもらって世界に柳井縞を知ってもらいたい」という意見があった。

東京2020大会に出場した選手からもメッセージがあった。フェンシング男子エペ団体で金メダルを獲得した加納虹輝選手からは「応援グッズを送っていただきありがとうございます。山口県の方々に応援されていることを忘れずにオリンピックの舞台では全力で戦ってきたいと思います。先日送っていただいた応援グッズを早速、活用させていただいております」とメールをいただいた。この内容は小学校の児童に共有した。

新型コロナウイルスの影響で制約された中、模擬株式会社山口魅来は、文化祭、地域のショッピングモール、地域イベント、ネットショップなどで開発した商品の販売をした。年々商品のラインナップも増えていき、伝統工芸事業グループで369,600円売り上げた。小型機織機と柳井縞藍染反物は積算の結果115,000円と高額だったため売ることではできなかった。しかし、展示をすると目玉商品としてお客さんが足を止めてくれ、ネクタイなどの商品が売れるきっかけとなった。お客さんから「地域の方と協力して山口県の商品を開発してすごいと思いました」、「高校生が株式会社を設立するとは、時代の進化を感じました。将来にプラスなると思います」という意見があった。

この取り組みが波及し、山口県広報誌「ふれあい夢通信」読者プレゼントの依頼もあった。令和4年11月に山口6次産業化推進大会にブース出展を行い、企業からの商談や山口県副知事に活動を紹介することができた。令和4年度やまぐち若者MY PROJECTに出場し、山口県教育委員会教育長賞を受賞した。高校生たちの連携による取組は多くのマスメディア²⁾に取り上げられ、ラジオに出演することもできた(図19)。



図 19 マスメディアへの掲載とラジオ出演

5 おわりに

私たちは、やまぐちハイスクールブランド創出事業を通して、人との繋がり大切さと経験をすることの楽しさを学んだ。活動をしていく中で、様々な方と接する機会があり、工業系学科は「ものづくり」が得意だが、他学科の生徒は苦手な人もいることが改めて良くわかった。しかし、仲間とお互いの得意、不得意なところを補いながら活動していくと、とても大きなプロジェクトになっていったと実感できた。仲間から「すごいね、よく作れるね」、「ありがとう」と、感謝される時はとてもうれしく、大きな達成感を得た。逆に、仲間にも助けてもらい、仲間の力に感謝しながら取り組むことでプロジェクトを充実させることができた。様々な考え方を持つ人と活動することで、新しい発見をすることができ、経験、体験を通して得られた知識・技術などは、将来必ず役に立つものであり大切にしていきたい。

今後も模擬株式会社山口魅来と地域の方とタグを組み、商標を生かして価値を高めた商品を開発し、もっと山口県を盛り上げたい。

<注>

- 1) 山口県教育委員会のホームページより引用
- 2) 山口新聞、令和4年11月8日より引用